

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 17 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03069

研究課題名(和文) 幕末期長州藩における洋学の受容と展開 - 海外留学生の果たした役割を中心として -

研究課題名(英文) Acceptance and development of Western learning in the Choshu domain during the Bakumatsu era: Focusing on the role of Japanese overseas students

研究代表者

小川 亜弥子 (OGAWA, Ayako)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70274397

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幕末期長州藩における軍事科学的洋学の受容と展開の様相を解明するため、新たに、長州藩の海外留学生の動向に焦点を当てたものである。本研究の成果は、次の4点になる。

第一は、万延・文久期における長州藩士の幕府遣外使節団への随従と、彼らの帰国後の動向を明らかにしたこと、第二は、文久期長州藩士の海外留学と、彼らの帰国後の動向を究明したこと、第三は、慶応期長州藩士の海外留学と、彼らの近代日本の建設への関与を解明したこと、第四は、こうした海外渡航や留学実現の背景には、桂小五郎(木戸孝允)が有する二つの人的ネットワークの存在が不可欠であったと実証したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で対象とする幕末期長州藩の海外留学生については、これまで、海外留学史や幕末教育史上で、諸藩による意欲的な留学生派遣の事例の一つとして、取り上げられてきた。しかし、その多くは、文久3年に国禁を破りイギリスへ密航した5人の留学生に焦点を当てたものとなっており、当該期の渡航や留学を総体として解明する段階にまでは至っていない。

本研究によって、万延元年から慶応3年の間に海外渡航・留学を果たした藩士18人の動向とその背景が明らかになった、と考えている。また、この成果によって、長州藩明治維新史研究の欠落を補えると同時に、幕末洋学史研究の空白を埋めることにもなる、と考えている。

研究成果の概要(英文)： The aim of this study is to clarify the nature of the acceptance and development of Western military science in the Choshu domain during the Bakumatsu era (end of the Edo period). Here, a novel focus is on the movements of Japanese overseas students within the Choshu domain. The results are summarized as follows.

The first three points were the identification of the following Choshu clan members and clarification of their respective movements after returning to Japan, as well as their involvement in the establishment of modern Japan: first, those involved in the Shogunate government's overseas missions during the Manen and Bunkyu(1860-1863); second, those who studied overseas during the Bunkyu period (1861-1863); and third, those who studied overseas during the Keio period (1865-1867). Fourth, it was demonstrated that two personal networks of Katsura Kogoro(Kido Takayoshi) were indispensable for the realization of such overseas travel and studies.

研究分野：日本史学

キーワード：長州藩 洋学 海外留学生 桂小五郎(木戸孝允) 斎藤弥九郎 吉田松隆

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

維新の実行過程で、その勝敗を分けた重要な鍵は、二つある。一つは、軍事面、即ち、用兵、砲術、軍制、及び武器等の面で、西洋化がいかに早く、しかも効率的に推進されていたか、という点である。もう一つは、それを支える富国強兵策が、洋学の知識や技術をどの程度消化し、実践的效果をあげたのか、という点である。その意味で、研究代表者は、この変革の重要な担い手となった長州藩の洋学は格好の素材であると認識している。しかし、従来の洋学史研究は、長州藩の洋学を概説的な把握にとどめ、十分な検討を加えないまま放置してきた状況にあった。

こうした洋学史における長州藩の研究状況を克服するため、研究代表者は、これまで主として、長州藩の洋学を軍事科学的側面から実態解明することに努めてきた。これは同時に、従来、政治史・経済史的分野の分析に終始してきた長州藩の明治維新史研究に別の面から光を当てるといふ、二重の意味を有したものである。

ただし、上記のような研究代表者による一連の研究には、方法論上の問題が内在していた。即ち、長州藩による軍事科学的洋学の受容については、藩地の諸術伝習や国内遊学などの、いわゆる《日本国内》での摂取という一方向からのアプローチに止め、《日本国外》での摂取という視座からの分析を埒外に置いてしまった、という点である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述のような問題意識や研究の背景を踏まえ、幕末期長州藩における軍事科学的洋学の受容と展開の様相について、新たに、海外留学生の動向に焦点を当てて検討することにある。具体的には、万延元年(1860)から慶応3年(1867)までを対象に、藩士18人の海外渡航・留学がどのような動機と目的で実現したのか、その全体像を明らかにすることである。

3. 研究の方法

長州藩の藩政史料や関係史料を用いながら、次の4つに焦点化し、実証研究に取り組んだ。第一は、万延・文久期(1860~1863)における長州藩士の幕府遣外使節団への随従と帰国後の動向について、第二は、文久期(1861~1863)長州藩士の海外留学帰国後の動向について、第三は、慶応期(1865~1867)長州藩士の海外留学と近代日本の建設への関与について、第四は、海外渡航や留学を実現させた人的ネットワークについてである。

4. 研究成果

(1) 万延・文久期幕府遣外使節団への随従

万延元年のアメリカ渡航

長州藩で最初に海外渡航を経験したのは、北条源蔵 北条瀬兵衛(大組、109.981石)の弟、長州藩第1次長崎海軍直伝習生であった。万延元年(1860)の幕府遣米使節団に、外国奉行組頭成瀬善四郎の従臣としての資格を得たことによる。渡航費として藩政府が用意した御心金は、金100両であった。幕府による遣米使節団派遣の情報は、源蔵が師と仰ぐ勝麟太郎(海舟)から入手したものである。源蔵と麟太郎の関係は、安政2年(1855)に幕府が開設した長崎オランダ直伝習所での修業の時代に遡る。アメリカに渡った源蔵が最も注目した場所は、サンフランシスコのメア島の海軍工廠であった。同所の造船所では、咸臨丸の破損箇所の修繕が行われていた。この時期の長州藩は、丙辰丸(君沢型スクナー)と庚申丸(3本帆檣バーク)を建造し、蒸気船の購入を視野に入れていた。洋式軍艦の修理を可能とするドックと工作場の整備・拡充は、必至となる。メア工廠の見学が叶ったことは、源蔵にとって、絶好の機会であった。帰藩後は、同所の視察で得た情報を基に、洋式海軍充実の重要性和蒸気軍艦の必要性を藩政府に力説している。以後、源蔵は、松島剛蔵 寺社組、40石、藩医(鍼医)、西洋兵学者、次弟小田村伊之助の妻は吉田松陰の妹 とともに長州藩の海軍興隆の支柱となり、海軍局の開設や海軍学校の設立に力を尽くした。

文久元年のロシア領渡航

桂右衛門 大組、100石、長州藩第2次オランダ海軍直伝習生、堀達之助に英学師事 と山尾庸三 吉敷郡二島村長浜の山尾忠治郎の二男、斎藤弥九郎に剣術師事、江川太郎左衛門に洋式砲術師事 による海外渡航については、当時、江戸の有備館の舎長であった桂小五郎(木戸孝允)和田昌景(寺社組、藩医、20石)の子、桂九郎兵衛(大組、150石)の養子、吉田松陰師事、斎藤弥九郎に剣術師事、中島三郎助に造船学師事、手塚律蔵・神田孝平に蘭学師事 の斡旋により実現した。文久元年(1861)に幕府が箱館奉行所支配調役の北岡健三郎を亀田丸(箱館奉行所建造の2隻目のスクネール型帆船)の船将としてロシア領黒竜江地方を探索させた時、同艦への極秘の乗船を成功させたことによる。健三郎は小五郎の剣術師範斎藤弥九郎の実弟で、小五郎とは旧知の間柄であったことから、首尾良く事が成就したものである。懸案の旅費についても、小五郎が算段している。馴れぬ地での洋式帆船の操縦は苦勞の連続であったものの、航海中の測量を初めとした実地の体験は、二人にとって貴重な経験となっている。右衛門は、文久3年の下関戦争の折には、蒸気船壬戌丸(ランスフィールド号)の総督を務めるとともに、以後は、長州藩の海軍の充実に尽力した。庸三にあっては、帰還後も函館に留まり、蘭学者武田斐三郎の塾で測量術の修業を行ったといわれている。

帰還後は、庸三は函館に留まり、右衛門は長州藩の海軍の充実に力を尽くした。

文久2年のヨーロッパ・上海渡航

北条源蔵とほぼ同様のパターンで、海外渡航を実現させたのは、杉徳輔（孫七郎）植木五郎右衛門（無給通、112.983石）の二男、杉彦之進（大組、156.758石）の養子、養母は周布政之助の実姉であった。文久2年(1862)の幕府による遣欧使節団に、会計方伊勢屋八兵衛の雇人新助という名義での随従が可能になったことによる。使節団派遣の急報が江戸の藩政府から参勤滞留・療養中の藩主毛利敬親にもたらされると、藩主敬親の小姓役を拜命していた徳輔に白羽の矢が立った。これを受け、蕃書調所教授手伝の手塚律蔵により、使節団随員の岡崎藤左衛門への斡旋の依頼が行われ、手土産金として金1000疋が支払われた。藩政府が徳輔のために用意した渡航費の合計は、金550両であった。渡航中の徳輔は、大工業国家で大貿易国家でもあるイギリスに強い関心を示す一方で、イギリスによる日本の植民地化の危機を現実のものとして受け止めている。帰国直後には、桂小五郎に面会し、渡航中に得たフランスに関する風説を伝え、危機意識を共有している。視察の報告を受けた藩主敬親は、兵庫御備場の地理見聞を命じ、対外防備施設の築造に海外で得た知見を生かすよう命じた。

実は、この遣欧使節団への随行を希望していた者は、杉徳輔だけではなく、桂小五郎もその一人で、既に前年の文久元年には、その意向を周布政之助や来原良蔵らに漏らしていた。藩政府が許可しなかったため、自身に代わり、世子毛利元徳の小姓役高杉晋作 高杉小忠太（丹治）（大組、200石）の嫡子、吉田松陰師事に機会を与えようと奔走したが、これも敵わなかった。文久2年の晋作による隣国清国への渡航は、こうした動きの延長で実現したものである。結果として、晋作がヨーロッパではなく上海に赴いたことは、その後の彼の行動に大きな影響を与えた。イギリスを中心とする西欧列強のアジアに対する意図が大国清国でどのような形で具現化しているのか、その様子を目の当たりにしたからである。上海での鮮烈な体験は、長崎に帰着した晋作を、オランダ人と交渉し独断で蒸気船の購入契約を結ぶという行動へと向かわせた。結果は破談に終わる。その後、京都で藩主毛利敬親に謁見を果たすと、上海視察の様子を詳細に報告している。その後の晋作による奇兵隊構想などは、上海で体験した植民地化の危機意識と連なるものである。

(2) 文久・慶応期海外留学

文久3年のイギリス留学

長州藩初のイギリス留学生となったのは、志道聞多（井上馨）井上五郎三郎（大組、103.671石）の二男、宍道慎平（大組、253.667）の養子、のちに復籍、斎藤弥九郎に剣術師事、岩屋玄蔵に蘭学師事、江川太郎左衛門に洋式砲術師事・山尾庸三・野村弥吉（井上勝）井上与四郎（大組、202.336石）の三男、野村作兵衛（大組、251.517石）の養子、のちに復籍、長州藩第2次長崎オランダ陸軍直伝習生、蕃書調所へ入所、武田斐三郎に蘭学師事・伊藤春輔（伊藤博文）

林十蔵（中間、伊藤直右衛門の傭人）の長男、のち伊藤家と縁組みして改姓、吉田松陰に師事、来原良蔵（長州藩第2次オランダ陸軍直伝習生監督）の手附、桂小五郎の手附・遠藤謹助 長州藩江戸藩邸公儀人遠藤市太郎の弟の5人である。彼ら5人は、日本初のイギリス留学生でもあった。文久3年（1863）5月に攘夷攻撃の先頭を切った長州藩は、それと前後して、密かに5人をイギリスへ送り出した。来るべき開国時に備えるためである。この密航は、聞多らの宿志を叶えるため、周布政之助・来島又兵衛・村田蔵六・桂小五郎ら藩の要路が密かに動き、藩主毛利敬親の内諾を取り付けた形で実現した。5人分の渡航費については、藩主敬親の御手元金から金1,000両が支出されるとともに、麻布藩邸の穴蔵金（藩主一人の特有物ともいふべき非常の際の予備金、藩主の許可なく支出することは禁止）の一部を担保に、江戸の豪商大黒屋の横浜支店から金5,000両が貸し渡された。ロンドンでの5人は、ユニバーシティ・カレッジの法文学部聴講生として、主として自然科学系の科目を履修し、学業の合間を縫って、市内各所の銀行や博物館・学校・工場・造船所などを巡見した。元治元年（1864）3月、聞多と春輔は、自藩の危急を救うため急遽帰国を決意し、残る3人に後事を託した。体調を崩した謹助は慶応2年（1866）に、弥吉は明治元年（1868）に、庸三は同3年にそれぞれ帰国した。その後、3人はいずれも新政府に出仕して、テクノクラートとして留学の成果を遺憾なく発揮することとなる。

慶応元年のイギリス留学

長州藩は、慶応元年(1865)に、再び、イギリスに留学生を密航させた。当初は、高杉晋作の希望を藩政府が黙認した形で、晋作と伊藤春輔のイギリス派遣が決定し、金3,000両の留学費の算段も終わっていた。しかし、晋作は、長崎で密航の斡旋を依頼していたイギリス商人グラバーらから、下関開港の方策を講ずることの方が先決である、との説得を受ける。晋作の宿志は、従弟の南貞助 南空之助（大組、160.082石）の子、高杉晋作の従弟、兄亀五郎は吉田松陰に師事・山崎小三郎 大組士（高不明）若くして癸亥丸の総督に就任・竹田庸次郎 竹田淳朴（寺社組・御茶堂、57.850石）の子、勝麟太郎に海軍学師事 の3人に託されることとなった。ロンドンで遠藤謹助・山尾庸三・野村弥吉と合流した3人は、日夜勉学に勤しむが、生活自体が成り立たない状況に陥った。晋作から渡された金1,000両は直ぐに底をつき、イギリス商人からの借り入れ

もままなかつたからである。こうした中で起きた小三郎の病死という事態は、長州藩の関係者に大きな衝撃を与えた。志だけでは果たせない留学の現実を知った藩政府は、桂小五郎が中心となって、直ぐさま留学生の学資調達に動いた。慶応3年9月、留学を終えて下関に帰着した貞助は、藩政府一同の出席のもとで、留学報告会を行った。庸次郎の動静については不詳である。

慶応3年のイギリス・オランダ留学

幕長戦争が終盤に差ししかかった慶応2年(1866)11月、長州藩は、毛利幾之進(親直)毛利広梯(一門、阿川毛利、7391.289石)の四男、毛利元潔(一門、吉敷毛利、10855.59石)の養子、遊撃隊総督として高森に出陣、第2次幕長戦争開戦後は芸州口で諸兵総指揮役に就任・鈴尾五郎(福原芳山)栗屋親睦(寄組、4915.552石)の子、福原越後(永代家老、11314.341石)の養子、干城隊総督に就任、第2次幕長戦争開戦後は芸州亀尾川口で諸兵総指揮役に就任・河瀬安四郎(真孝)石川伝左衛門(大組、100石)の三男、第2次幕長戦争開戦後は芸州口で遊撃隊参謀に就任の長崎での兵学修業の願いを容れ、それぞれの戦時の役職を解いて遊学を許可した。彼らの真の目的は海外留学で、長崎遊学は名目に過ぎなかった。薩摩藩船で長崎に向かう船中で五代才助からイギリス留学を強く勧められた3人は、桂小五郎、広沢兵助らに斡旋を依頼する。小五郎と兵助は賛意を示し、彼らの意向を最優先する形で留学を実現させようと動いたが、事は容易に運ばなかった。文久3年(1863)と慶応元年の2度にわたるイギリス留学が、実行した者勝ちの、いわば脱兎の如き状況で強行されてきたこと、これが裏目に出たためである。この時期の藩の首脳陣の間には、例え藩の将来を見据えた真摯な行動であったとしても、藩主毛利敬親の決裁を得ないままでの海外留学は国典を乱すものである、との認識が広がっていた。藩士の海外留学についてはこれまで黙認を貫いてきた長州藩も、国内遊学と同様に、まずは制度を確立させた上で、一定の選抜と派遣の手続きが必要である、との姿勢を漸く打ち出した。その後、兵助、小五郎らによる重臣説得や藩主敬親への言上が成功し、慶応3年3月1日、3人に対し36か月の「洋行」の辞令が発せられた。幾之進と五郎は自費で、安四郎は公費での取り扱いであった。しかし、実際には、グラバーの協力により、辞令の発令以前に、3人はイギリスを目指して長崎を出航していた。彼らの行動は、藩主父子の逆鱗に触れた。

慶応3年に入ると、長州藩では海外留学の希望者が急増したため、藩政府はその対応に苦慮することとなる。同年1月23日に幕長戦争は解兵したものの、長州処分問題が未だ終結しない状況にあっては、藩士の長崎滞在所のものが薩摩藩の名義を借りなければ実現しなかったからである。同年7月22日、長崎で海外留学の機を窺う予備群の中から、河北義次郎 河北仙蔵(大組、100石)の嫡子、御楯隊に入隊、第2次幕長戦争開戦後は芸州口で軍艦に就任、のち整武隊の軍監にも就任にアメリカ留学の正式な辞令が下った。これは、義次郎の桂小五郎への再三にわたる働きかけが功を奏したものである。同日、天野清三郎(渡辺蒿蔵) 渡辺小五郎(大組、85石)の弟、天野駒太郎(大組、47.5石)の養子、のちに復籍、奇兵隊に在籍、萩博習堂・山口の三兵学科塾・三田尻海軍学校に入学と飯田吉次郎(俊徳) 飯田平太(大組、71.3石)の嫡子、村田蔵六(大村益次郎)の普門寺塾に入門、山口兵学校の歩兵塾・三兵学科塾に入塾の2人にも留学が認められ、それぞれアメリカとフランスに派遣されることとなった。義次郎ら3人はいずれも松下村塾の出身者であった。この時点の長州藩においては、海外留学制度それ自体が整っていなかったことから、小五郎との間では、結果として、松下村塾出身者という人脈がものをいうことになったと推測できる。同年12月初めに横浜を出港した3人は、アメリカのポストンにしばらく滞在し、その後、義次郎と清三郎はロンドンを、吉次郎はオランダを目指した。この時期の海外留学生の在留期間は比較的長く、6人はいずれも、明治4年(1871)から同6年の間に帰国している。帰国後は、万国に対峙する人材として、留学の成果を発揮した。

(3) 桂小五郎(木戸孝允)が有する二つの人的ネットワーク

以上のように、長州藩の洋学受容の一形態である海外渡航・留学を時系列で追っていくと、幕府による海外渡航の禁制期から慶応2年(1866)4月の解禁以後に至るまで、その多くの場面で「桂小五郎」の名が登場するなど、彼の存在感は異彩を放っている。長州藩士が海外渡航や留学を実現できた背景には、小五郎の識見とともに、彼が有する二つの人的ネットワークの存在が不可欠なものとなっていた。

一つ目は、斎藤弥九郎の下で得た剣術ネットワークである。長州藩では、嘉永4年(1851)3月、これまで家業人に限り認めていた私費での国内遊学を剣・槍出精の諸士にも拡大し、嘉永5年7月には、遊学諸士への公費の支給を開始するなど、遊学を公的制度的下に明確に位置づけていた。桂小五郎は、この公費遊学の選抜には漏れたものの、私費での遊学の許可を得て、江戸の弥九郎の剣術塾を目指すこととなる。弥九郎は、嘉永3年4月1日に吉田松陰の「兵学入門起請文」に名を連ね、その嫡子新太郎は、長州藩の江戸の有備館に頻繁に出入りしたり、嘉永2年6月と同5年8月には門人を伴い来萩し明倫館で試合や剣術の指南を行ったりするなど、長州藩とは深い縁を結んでいた。加えて、父子ともに江戸の桜田藩邸への出入りが認められ、藩主毛利敬親の出府の際には賜謁が許されていた。小五郎は、嘉永5年11月15日に弥九郎の剣術塾に入門、翌年には、早くも塾頭にまで上り詰めることとなる。当時の諸藩士にとって、剣術修業という名の下での江戸遊学は、武士身分として単に武術の腕を磨く場ではない。自藩を超えて他藩の有志と交流したり、著名な有識者を訪問したりして交際の幅を広げ、視野を広げる絶好の場でもあった。江戸で培った人脈とそこで得た情報、そして自身の名声は、小五郎にとって大きな武器となった。

更に、ペリー来航の衝撃は、江戸での小五郎を江川太郎左衛門、中島三郎助、手塚律蔵、神田孝平へと結びつけ、西洋軍事技術に解決の道を求める方向へと導くこととなった。幕末期長州藩の海外渡航・留学は、こうした国内遊学の延長線上に位置付くものであり、試行錯誤を重ねつつ実現したものといえよう。

二つ目は、松下村塾グループとしてのネットワークである。海外渡航者・留学生 18 人のうち 9 人が、松下村塾の出身であったり、村塾グループと行動をともにしたりした者たちであった。この事実は、看過できない。桂小五郎自身は、嘉永 2 年 10 月 1 日に、吉田松陰の門に入った。松陰と 3 才違いであった小五郎は、師弟というより同志としての関係性の方が強い。松陰の持論を継承した門下生たちが、師の遺志を引き継ぐ形で海外留学を実現させようとした時、松門の大先輩で松陰の盟友である小五郎に、その斡旋を依頼したのも、自然の流れであろう。況してや、小五郎は、松陰死後の安政 6 年(1859)11 月には江戸の有備館の用掛を務め、万延元年(1860)4 月には有備館の舎長に就任するなど、江戸藩邸の文武修業の責任者という立場に就くとともに、その後は、藩政の中枢に参画するなど、頼れる大先輩でもあった。更に、小五郎自身も、松門の年長者として、長州藩の若者らの志を遂げさせることが自ら果たすべき重要な任務である、と自覚していた向きもある。松下村塾グループに身を置くことは、アクションを起こす際の一つの重要なツールであった。海外渡航・留学実現の背景に、文久元年 11 月の一燈銭申合、文久 2 年(1862)11 月の攘夷血盟(御楯組血盟)、元治元年(1864)7 月の奇兵隊血盟などと類似の松下村塾グループによる同志的結集があったことは、否定できない。

これらのことは、裏を返せば、長州藩士による海外渡航・留学は、使命感と知的好奇心に突き動かされた藩士たちが個々に有するネットワークを駆使して実現させたものであり、藩が関与し上から推し進めたものではない、ということになる。当初は、国内遊学の延長線上にあった海外渡航・留学も、次第に、一藩ナショナリズムを超えた近代的ナショナリズム(端緒的形態)に寄って立つところとなる。彼らが習得し蓄積した知識や技術は、長州藩のみならず、維新後の明治政府の政策の中で開花した。その意味で、幕末・維新时期における彼らの存在は、明治維新の連続性の上に位置付くものといえる。

なお、本研究においては、幕末期長州藩の海外渡航・留学の総体を解明することに主眼を置いたため、留学生の足跡を個別に辿り、個々の留学の成果を明らかにする、という側面が希薄となった。加えて、幕府や薩摩藩の留学生派遣のあり方との比較についても、言及できなかった。これらについては、今後の課題としたい。

< 引用文献 >

小川亜弥子、「幕末期長州藩の洋学と海外留学生」、『洋学』27 号、洋学史学会、2020 年、177-213 頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小川亜弥子	4. 巻 27
2. 論文標題 幕末期長州藩の洋学と海外留学生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 洋学史学会研究年報 『洋学』	6. 最初と最後の頁 177-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小川亜弥子
2. 発表標題 幕末期長州藩の洋学と海外留学生
3. 学会等名 洋学史学会（函館大会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------